

No.628 (改題588号)

2023年

8月30日(水)

新社会兵庫



週刊 新社会

発行所：新社会党

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 三成工業ビル3F
TEL. 03(6380)9960 FAX. 03(6380)9963

新社会党兵庫本部 神戸市中央区中山手通5丁目2-3 ☎078(361)3613 FAX078(361)3614 毎月第2、第4水曜日発行 購読料月400円(1部200円)郵便振替:01120-7-16805

反核・非戦の決意新たに 明石で第19回ピースフェスタ

敗戦から78年の夏。戦争と平和をめぐる世界の状況は一段と悪化し、深刻化している。ロシアによるウクライナ侵攻はさらに長期化し、日本を含め軍事協力、軍事同盟の強化が進み、核抑止論をも勢いづかせている。日本では南西諸島の軍事要塞化や敵基地攻撃能力の保有を含む防衛費2倍化など軍拡の暴走が止まらず、「新たな戦前」という表現がより真実味を持つような状況が生まれてきた。そうしたなか、広島県知事、広島市長や長崎市長がそれぞれの平和記念式典でそろって核抑止論を強く批判し、核廃絶への強い思いのメッセージを述べた。改めて戦争の悲惨さと平和の尊さを考えさせられる8月だった。



メイン行事の田島征彦さん(田内)の講演会には150人が参加した。8月6日、明石市勤労福祉会館

「戦争体験談の集い」、最終日の6日はメイン行事として『絵本で何ができるか』をテーマにして「たじまゆきひこ講演会」が開かれ、講演会には150人が参加した。淡路在住の田島征彦さんは今年、沖繩戦を正面から描いた『なまむしせいとく』で講談社絵本賞を受賞。40年にわたる沖繩への関わりを集大成ともいえる作品が注目されている。

明石地労協人権平和センターや多くの市民団体などが主催する「第19回ピースフェスタ明石」が7月28日から8月6日の期間、明石市の2会場を使って開かれた。

「被爆78年の夏」は今年、沖繩戦を正面から描いた『なまむしせいとく』で講談社絵本賞を受賞。40年にわたる沖繩への関わりを集大成ともいえる作品が注目されている。

被爆78年の夏 「原爆と人間」写真・絵画展

神戸市原爆被害者の会が今年も開く

被爆78年の夏、神戸市原爆被害者の会(立川重則会長)は今年も「原爆と人間」写真・絵画展を8月3日から8日までの期間、JR神戸駅地下のデュオコートにあるデュオギャラリーで開いた。今年も「原爆と人間」が加わったように、昨年ひきつづき写真よりも絵画を中心とした展示となった。



会場には戦時下のくらしの品々も展示され戦争への思いを呼び起こした。明石市

ひょうご(142) 描き、歩き



五百羅漢

(加西市北条町)

北条町から福崎に向かう県道の途中の中国自動車道の下をくぐる近くに羅漢寺があり、ここに四百数十体の石仏が群をなす県指定文化財の五百羅漢がある。17世紀前半に造られたのではないかと推測はされているが、「いつ頃、だれが、何のために」これを造ったのか、史実、資料、確かな言い伝えも一つとして存在しない謎の野仏群である。その石仏の表情は多彩で2つと同じ顔のものはない。怒った顔、かすかに笑みをたたえた顔、悲しげな顔、穏やかな表情の顔、瞑想する顔、語り掛けるような顔。古くから「親が見たげりゃ、北条の西の五百羅漢の堂にござれ」とうたわれ、素朴ながら表情豊



彦の世界」として、沖繩戦にまきこまれた少年の物語を描いた絵本『なまむしせいとく』原画展をはじめ、戦時下の人々の暮らしの品々や明石空襲の記録、憲法、原爆、軍拡などの課題を訴えるパネルの展示が行われた。さらに5日は市民による「戦争体験談の集い」、最終日の6日はメイン行事として『絵本で何ができるか』をテーマにして「たじまゆきひこ講演会」が開かれ、講演会には150人が参加した。



広島の高校生が被爆者の体験を聞いて描いた絵が多く展示された。8月4日、神戸市中央区

来場者には親子連れや若い人の姿も多く、外国人が核兵器禁止条約の批准を日本政府に求める署名をする姿もあった。

水脈

岸田政権の政治姿勢。「聞く力」とは聞き流す力のことだと、すでに誰もが知るところだが、それは納得できる方針を目指した議論・検討ができないことの証明だ。▼政権の座に長くあるためには「広島」を利用し核抑止力を正当化することも厭われない。保守層の支持を得るために安倍元総理の遺志・憲法改悪を実現する意欲を見せる。米国から兵器を爆買し、台湾有事に備えて「共に戦う」覚悟があるし、旧統一教会がらみの疑惑は時の過ぎるのを待たばよい。原発再稼働も、汚染水放出も、将来の安全よりと見え、最善策で処理したい。▼国会は、いつ解散すれば選挙に勝てるかを計る機会と考えているのだろうか。内閣改造で目先を変え支持率を回復させるつもりなら、政権の身内に大甘、スキャンダル続出の側近政治もある意味納得だ。わかりやすい「トカゲのしっぽ」に使える▼科学技術・イノベーション、デジタル田園都市国家構想、カーボンニュートラル実現、孤独・孤立対策、少子化対策、所得向上の「賃上げ」、家計の資産形成支援等々が並ぶ新しい資本主義の骨太政策。暑さで疲れ切った8月が終わる。こんな政治では幸せになれない。将来のために気合を入れ直し政治変革を求めよう。

「安保と三池」の中で生まれた社青同 結成60周年を祝う 兵庫地本が記念レセプション



結成60周年を迎えて活動報告と今後への決意を述べる横良裕・社青同兵庫地本委員長＝7月29日、神戸市中央区・萬寿殿

1960年の「安保と三池」のたたかひの高揚の中で当時の日本社会主義青年部を母体にも生まれた青年同盟(社青同)である。社会主義を学び行動する青年組織として全国の都道府県に地区本部(地本)がつくられ、兵庫でも同年、社青同兵庫地区本部が結成された。

国際・国内情勢は当時からは大きく変化してきて、そのなかで活動を続け、2020年には結成60周年を迎えた。兵庫地本も結成60周年を祝うレセプションを企画していたが、コロナ禍のため延期を余儀なくされた。7月29日、「社青同兵庫地本60周年記念レセプション」が神戸市内で開かれた。レセプションには現役の役員のほか、OB・OGら約30人が集った。レセプションは横良裕兵庫地本委員長のあいさつに始まり、新社会党兵庫支部の栗原富夫委員長や社会主義協会兵庫支部の代表らの来賓あいさつと乾杯を行い、その後は参加者ひとりひとりに社青同に関わる思い出や長年の運動への思いなどが述べられ、和やかに交流が進んだ。レセプションには兵庫地本出身で長く中央本部スタッフがおくられた。

「沖繩、再び戦場(いくさば)へ(仮)スピン」(企画)・13時・16時・19時
 オフ作品(45分)上映会
 ◎9月9日(土) 第1回 講習室◎各回会場費200円◎先着30人◎主催・インフォメーション

「ストップマイナ保険証 市民の集い」
 ◎9月23日(土・祝)14時
 ◎長田文化センター・大会議室
 ◎講演 白石孝さん(フライバシーアクション代表)など ◎参加費8000円
 ◎主催・憲法を生かす会・西神戸連絡会

ため息の出る自公政権の暴走
 第2次安倍政権以来、自公政権の暴走が止まらない。惨憺たる結果になったアベノミクス、戦争する国づくり、モリ・カケ・サクラ、官僚の付度、旧統一教会との融合、大軍拡の強行、無謀な大阪万博とIR……。挙げていけばキリがない。

「マイナ保険証」問題が急浮上
 そんな中で、「マイナ保険証」問題が大きな社会問題として浮上してきた。「来年初に健康保険証を廃止して『マイナ保険証』に一本化する法律」の成立前後から、公金受取口座の登録などトラブルが報道され始めた。

「マイナ保険証」問題の構造
 問題は単にトラブル発生だけではない。①「カードを作れない」「管理できない」など致命的なシステムの問題、②無責任な情報管理体制(多岐にわたる個人情報紐づけされるが、損害を受け

ても、デジタル庁は責任を負わない)、③その保護されない個人情報が入ったカードを持ち歩かねばならない、④システムの構築と維持、一部の企業の大利権、⑤ビッグ・データ(大量の個人情報)を使った医療産業を手始めとした大企業の利益追求、などである。

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」は、「取得は任意」としてマイナカードを事実上義務化するもので、民主的どころか詐欺的手法である。

さらに重要な問題は、「情報」の民主的管理である。社会にコンピュータが浸透するのは止めることができない。最近話題になっているAIのChatGPTにしても、民主的な管理に向けて世界は動き出している。

「マイナ保険証」問題の構造
 問題は単にトラブル発生だけではない。①「カードを作れない」「管理できない」など致命的なシステムの問題、②無責任な情報管理体制(多岐にわたる個人情報紐づけされるが、損害を受け

止まらない政府
 DXを掲げる岸田政権は、これだけ問題・不信が噴出して、「資格確認書」でお茶を濁して乗り切る構えだ。

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

私の主張

「マイナ保険証」問題の構造
 問題は単にトラブル発生だけではない。①「カードを作れない」「管理できない」など致命的なシステムの問題、②無責任な情報管理体制(多岐にわたる個人情報紐づけされるが、損害を受け

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「マイナ保険証」問題で
 社会運動の再構築を

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■沖繩、再び戦場(いくさば)へ(仮)スピン
 企画)・13時・16時・19時
 オフ作品(45分)上映会
 ◎9月9日(土) 第1回 講習室◎各回会場費200円◎先着30人◎主催・インフォメーション

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

「改憲の動きをウォッチング」
 ■麻生氏の暴言 「戦争させない覚悟」を新たに
 自民党の麻生副総裁は、訪問先の台湾で「中国が軍事的圧力を強める台湾海峡の平和と安定を維持するため、日本や米国、台湾による抑止力を機能させるには各国の『戦う覚悟』が必要だ(毎日)」と強調した。政府内部を含め調整した発言だといふ。となると、岸田首相とタッグの確信犯である。麻生暴言に対する沖繩の反応は、「日本に求められるのは、自衛隊の『南シント』で増強した抑止力を掲げ、『戦う覚悟』を中国に見せつけることではない。緊張緩和に向けた対話を重ねることだ」と、8月10日付の琉球新報社説は主張。

今年を闘う年にして仲間を増やす 武庫川ユニオンが第36回定期大会

武庫川ユニオン(飯田政志委員長)は8月6日、第36回定期大会を尾崎市内で開いた。昨年はコロナ感染拡大のため急ぎ「書面決議」となったため、2年ぶりの通常開催となった。大会には37人の組合員が参加した。



2年ぶりの対面での開催となった大会では闘いの報告があいついだ。8月6日、尾崎市

冒頭、飯田委員長は顔を合わせたの開催の喜びと昨年9月の小西純一郎副委員長の急逝に触れ、組合員のユニオンへの結束の強化を呼びかけた。議案提案は塚原久雄書記長が行い、最近の組合つづきの攻撃や組合の組織化などの動きを紹介しながら、「今年度を闘う1年にして仲間を増やしていこう」と訴えた。討論では、サンゼンの組合員が、有休を認めなかった会社がユニオンと

の交渉で有給を認められたもののお露骨な嫌がらせが続いていると報告し、「それでも、私は絶対やめずに闘う」と決意表明。総会体育館で働く組合員も、現場で働く人の過半数を組織してがんばっていることを報告。アマゾン配達員の組合員からは、ギグワーカーをめぐる問題と法整備の必要性が訴えられた。クリエイティブ会からは新クリーンセンター建設をめぐる雇用問題や市の委託費が安すぎ

る問題について決意を含めた報告がされた。大会の最後には、一ノ瀬剛書記次長から、2年後の尾崎市議会選挙に都築徳昭議員の後継者として立候補し、働く者の議席を守りたいとの決意表明があった。大会終了後は懇親会が行われ、参加者一人ひとりが近況報告があり、サンシン部の演奏、ピッコゲームなどで盛り上がった。(M・I)

戦争体験を次世代に引き継ぐ 神戸空襲を記録する会がシンポジウム

神戸空襲を記録する会(岡村隆弘代表)は7月30日、シンポジウム「空襲・戦災体験を次の世代に引き継いでいくために」を神戸市兵庫区の兵庫津ミュージアムで開き、約80人が参加した。シンポジウムは、郷土研究誌『歴史と神戸』(神戸史学会発行)の「神戸空襲を記録する会と中田政子さんの歩み」特集が刊行されたことを記念して持たれたもので、「神戸空襲を記録する会」のこれまでとこれから」と副題がつけられた。

冒頭、岡村代表が同会のこれまでの活動を紹介します。シンポジウムでは、パネラーとして神戸新聞論説委員の木村信行さん、22年の第25代高校生平和大使を務めた長富日向さん(甲南女子高3年)、21、22年と同大使サポートとして神戸新聞論説委員の田村信行さん、田政子さんの次女で同会世話人の馬場敦子さんも話し合いに加わり、「戦争体験の語り継ぎはある意味、空襲体験の継承など今後への課題を提起。また、シンポジウムに先立ち、同会の結成から近い関係者を通じてきた田辺真人さん(園田学園女子大学名誉教授、兵庫津ミュージアム名誉館長)による「神戸空襲を記録する会の活動と中田政子さん」と題する講演もあり、前会長の故中田政子さんの活動も偲んだ。

シンポジウムでは、パネラーとして神戸新聞論説委員の木村信行さん、22年の第25代高校生平和大使を務めた長富日向さん(甲南女子高3年)、21、22年と同大使サポートとして神戸新聞論説委員の田村信行さん、田政子さんの次女で同会世話人の馬場敦子さんも話し合いに加わり、「戦争体験の語り継ぎはある意味、空襲体験の継承など今後への課題を提起。また、シンポジウムに先立ち、同会の結成から近い関係者を通じてきた田辺真人さん(園田学園女子大学名誉教授、兵庫津ミュージアム名誉館長)による「神戸空襲を記録する会の活動と中田政子さん」と題する講演もあり、前会長の故中田政子さんの活動も偲んだ。



シンポジウムには高校生や大学生もパネラーとして登壇した。7月30日、兵庫津ミュージアム

味「命の伝言ゲーム」。内容は暗いながらも楽しみながら取り組んでほしい」と若い世代への希望を述べた。詳しく考察した。また、第2次世界大戦の惨禍が生み出した国連憲章と日本国憲法(とりわけ前文)についてもその意義を読み解き、戦争をいかにして食い止めるかということについての問題提起も行われた。その最後に、現在の問題として、日本の平和憲法Ⅱ非武装中立政策を世界にという基本的立場をしっかりと持ち、国家ではなく民衆が担う国家を超える国際連帯と、国連の機能強化の重要性を強調した。講演後の討論の中でも、現在の情勢の見方や「非武装中立」について活発な議論が行われた。

兵庫県の最賃は、10月から41円引き上げられるが、今回も全国平均を1円下回る。41円の引き上げは過去に例がないほどの引き上げ額だが、物価上昇に追いついていないと言えない。最賃の引き上げに関して、労働組合の役割について疑問がある。春闘はどうなるのか。上記の法では嘱託職員は10月の最賃の改定で引き上げられるが、他の職員は4月に賃金が改定される。ここに矛盾はないのか。月給制の人は、時間給を計算することがあるのだろうか。先日見た他社の労働条件通知書は、基本給が最賃を下回っていたが、その組合員は気づいていなかった。月給制で働く人たちは置き去りにされていないだろうか。初任給の引き上げは考えられているのだろうか。

放射能汚染水を海に流すな 日韓市民の徒步行進

ソウル→東京

韓国で原発の市民運動に関わる李元栄さん(元水原大学教授、国土未来研究所所長)は、6月18日にソウルを出発して7月18日に下関港に着いた。福島第一原発の放射能汚染水の海洋放出に反対し、韓国と日本の市民が東京までの1600kmを一緒に歩きながら、

日本の国会と内閣、そして韓国政府にその意思を込めた書面を渡すことを目指す行動だ。ソウルから徒歩で日本の国会議事堂を目指す李さんの行進に、日本各地の脱原発・反原発、子どもたちの未来や環境に関係する運動に取り組む個人やグループが移動の行

程に合わせて合流し、李さんと共に「汚染水を捨てるな」「汚染水を海洋に流すな」などのコールをしながら主に国道を歩き続けている。兵庫県には8月6日に到着。私の地元、明石では「脱原発明石・たこの会」が8日のJR東加古川駅からJR舞子駅まで

の行進に同行した。この時には広島在住のAさんが通訳としても参加、「超炎天下」の中を歩いた。8月13日には京都で集会。行進の途中では市民グループが交流会を開くなど、それぞれの思いを込めた取り組みを行い、9月11日に東京到着を予定している。無事にこの行進が達成されることを祈りつつ、福島の汚染水の放出を止める声をあげたい。(いなだ多恵子)



ソウルを出発して東京に向かう李元栄さん(中央)が兵庫を通過。8月6日、明石市

「戦争は回避できるか」 テーマに学習会

新社会党県本部青年委員会

新社会党兵庫県本部の青年委員会は8月13日、尾崎市内で津野公男さんを講師に「平和と戦争・戦争は回避できるのか」をテーマに学習会を開いた(写真)。



津野さんは、なぜ戦争は起こるのかという問題から話を始め、古代奴隸制社会から現代に至る歴史を追いながら、その時代ごとの戦争の目的や性格などをいねいに振り返り、現代の帝国主義の時代の戦争についてより

詳細に考察した。また、第2次世界大戦の惨禍が生み出した国連憲章と日本国憲法(とりわけ前文)についてもその意義を読み解き、戦争をいかにして食い止めるかということについての問題提起も行われた。その最後に、現在の問題として、日本の平和憲法Ⅱ非武装中立政策を世界にという基本的立場をしっかりと持ち、国家ではなく民衆が担う国家を超える国際連帯と、国連の機能強化の重要性を強調した。講演後の討論の中でも、現在の情勢の見方や「非武装中立」について活発な議論が行われた。

最賃が重視されているという点は、最も重要なポイントだ。10月に最賃が改定されるが、最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。

最賃引き上げと春闘

最賃が重視されているという点は、最も重要なポイントだ。10月に最賃が改定されるが、最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。最賃が上がるにつれて、賃金で生活が苦しいという声も出てくる。

地域ユニオン 416 あちこちあれこれ

若者のひろば

私は、現在40代。もちろん戦争を知らない世代だが、ストライキも知らない世代だ。まがりなりにも労働組合活動には関わり続けてはいるが、ストライキを経験したことも、見たこともないと言えりる世代である。

現に、日本のストライキの件数は1970年代をピークに減少傾向がつづく。厚労省の労働争議統計調査によると、最もストライキが多かった年は1974年で、半日以上ストライキが約5200件、半日未満のストライキが約6400件もあったとされた。ところが、2021年は、半日以上ストライキが32件、半日未満のストライキが36件と激減している。

そんな中、今年7月14日、アメリカの俳優らおよそ16万人が加入する労働組合が、報酬の引き上げやAIの活用に関する規制作りなどを求めて43年ぶりのストライキに突入したという報道が流れ

た。しかし、日本のテレビでの報道は、「俳優らは、撮影だけでなくプロモーションへの参加もできなくなり、日本でのイベントにも影響が出ます」(TBS)、「トム・クルーズも来日できず……ハリウッドで43年ぶりストライ

キ(日テレ)といった具合に、ストライキが迷惑な行為と聞こえるような報道が多かったように感じた。その姿はまるで『肉屋を支持する豚』と揶揄するものに見えた。

なお、このストライキは1ヶ月が経過した現在も継続されていて、年末まで続く可能性もあると言われているが、日本のテレビでは、最初以外は

ストライキに憧れる

省している」と答えてくれた。

龍谷大の脇田滋名誉教授(労働法)は、「フランス、イタリアなどでは以前からストライキが多く、近年は英国や米国、韓国でも賃上げを求めてストライキが増えている。各国で賃金が上がっている背景には労働組合の力がある。ストライキができず、労働環境の向上が滞れば日本の将来はない」と、警鐘を鳴らしている。

また、ジャーナリストの竹信三恵子氏は、「ストライキの減少は、労働者が要求を伝えるための基本的な権利が行使できていないことの表れ」と危ぶんでいる。

しかし、こうした中でも、全日本国立医療労働組合(全医労)や、靴小売り大手「ABC-MA RT」のパート従業員、回転すし「スシロー」のアルバイト従業員などがストライキを行い、賃上げ等の成果を出している。また、百貨店「そごう・西武」の労働組合もストライキ権確立に向けて実施した組合員投票が93%を越える賛成率でストライキ権が確立され、この結果をもって労使交渉を行っている。

日本でも、再び資本による攻撃を乗り越えて、ストライキによる労使交渉が当たり前になる日は来るのだろうか。

私はストライキを知らない世代、ストライキに憧れている。

(元井二郎)

『デンマークにみる普段着のデモクラシー』

小島フミ子、澤渡夏代、三浦トモシト著／かもがわ出版／1700円＋税

「民主主義陣営」を名乗る巨大な軍事同盟が世界中の紛争の地に関与する。私たちの国もその一員として連携強化を図るため、また、「民主主義陣営と違う価値観」を持つ中国の脅威に備えて、防衛予算の拡大と共に南西諸島の軍事基地化が進む。

昨年の選挙遊説中に起きた安倍元総理銃撃事件、今春の岸田総理の襲撃事件には、与野党、マスコミこそ「民主主義への冒涇」と非難の声が上がった。その選挙は、最も民主主義を語るものとされるが、投票率の低さもさることながら、候補者不足で無投票となった自治体が増え、民主主義を問う声がある。私たちの暮らす社会は、平和で人間的な暮

本棚

らしを営めるよう、民主主義によって専制的な権力行使を許さない努力がなされている。——はずであるが、民主主義に対する考え方は必ずしも一つではないのではないか。同調圧力を感じ、学校でも地域社会や職場でも、自分の考えを言わないことで「圧力」を避けて多数に従う」というような空気が支配する私

人びとが「しあわせ」といえるわけ

(副題)

私たちの国をこれから考える時、「民主主義」を問い直すことが必要ではないかと私は考えた。

本書は、昨年4月から今年3月まで1年間にわたり、『週刊新社会』5面に隔週連載された『デンマークからこんにちは』の著者、小島フミ子さんの新刊(共著)である。デンマーク人と結婚、デンマークで暮らし

ながら子育て、仕事をし、日本と行き来してきた2人の著者が、50年近いデンマーク暮らしから見えるもの、現在のデンマーク社会構築につながる150年余の歴史を丹念に追うことから「民主主義」を問いかけている。異文化の中で生きてきた2人の女性の眼から見たデンマークの「国の形」が、政治、教育、働き方、税への考え方、人との向き合い方等の現実の生活を通して見えてくる。著者には、高齢者の暮らしや教育、政治、女性の生き方

などデンマークを紹介する著書が多くあり、いずれも興味深かったが、本書は、「なぜ、デンマークと日本はこんなに違うのか」と抱いてきた問いへの答えを探る糸口になるかも知れない。

本書では、およそ150年前、デンマークの「デモクラシーの夜明け」とされる1848年、専制君主制を廃止し、立憲君主国家へ

移行、憲法制定のための国家集会が設置されることから始まる(選挙権が与えられる対象は、奉公人のいる世帯主、男性に限定されるなど限定的)。日本では明治維新を迎えた頃である。日清、日露戦争に勝利し、より強固に「富国強兵」の国作りへ突き進んだ日本。それに対し、デンマークは内戦、ロシア戦争で敗戦を繰り返す、肥沃な領土を失い、残されたものは国民。「外で失ったものは、うちで取り戻せ」と国民高等学校を国内各地に設立し、誰もが国の将来を考え、展望を開ける社会人になれるよう注力してきた。

侵略し敗戦に至った日本と、侵略され占領下の5年間を耐えたデンマーク。敗戦を迎えたそれぞれの第2次大戦後は、どちらも「民主主義国」であるが、その歩んでいる道は大きく違っているように見える。貧困と格差が課題に上る日本、幸福度世界一ともいわれるデンマークの違いはどこから来たのか。「民主主義とは何か」を問い直す本書である。

(岡崎宏美)

ワン・セカンド 永遠の24フレーム

文化大革命真っ只中の中国。砂漠を越えて一人の男が小さな町にたどり着いた。6年前、男は地元の権力者に睨まれ、些細な罪で捕えられ「労働改造所(強制労働所)」に収容された。そこを脱走してこの町にやってきたのだ。男が収容されていた間に妻には離婚され、今は、14歳になっている

娘は文化大革命に参加していった。この町では映画会があり、先ほど終わった。当時の民衆は、数ヶ月に一度巡回してくる映画が何よりの楽しみであった。

この男は、映画を見たかっ。しかし、映画作品ではなく、その前段に映されるニュースである。その中に1秒だけ娘が映っているらしい。

娘は文化大革命に参加していった。この町では映画会があり、先ほど終わった。当時の民衆は、数ヶ月に一度巡回してくる映画が何よりの楽しみであった。

この男は、映画を見たかっ。しかし、映画作品ではなく、その前段に映されるニュースである。その中に1秒だけ娘が映っているらしい。

れて地面に引きずられ、絡まった塊として遅れて町に到着した。

暗がりでは少年かと思っていた子どもは、この少女にはフィルムを狙う理由があった。少女は、父親に捨てられ、母親に死なれ、幼い弟と2人暮らしをしている孤児だった。読書好きの弟のため

に電気スタンドを借りたが、映画フィルムで作られた笠が不注意で燃えてしまったのだ。映画フィルムで作った笠はキラキラして、この辺りでは流行していたが、燃え

やすい。電気スタンドを貸した少年は、仲間と共にはあくまでもニュースを見たい。そこで、館主に事情を話すと、町の人を集め総動員で絡まったフィルムをほぐし、洗い、乾かして復元していった。そして、映画が始まり、男はニュースを食い入る



映画をめぐるとさまざまな思いを描く

少女の事情を知って男は同情した。しかし、男はあくまでもニュースを見たい。そこで、館主に事情を話すと、町の人を集め総動員で絡まったフィルムをほぐし、洗い、乾かして復元していった。そして、映画が始まり、男はニュースを食い入る

ように見つめる。それは、トラックから下ろされる物資を列に並んで運ぶ場面である。男性でも重そうな荷物をにっこり担いで運ぶ娘の姿に、男は憐憫を感じるが、大きな歴史の波が、男の思いなど小さな出来事としてかき消していくように思えた。館主は、男の気持ちは理解してくれたが、保安員(警察)への通報も忘れなかった。翌朝、複数の保安員に連行されていく時、男は映画館で見つけたフィルム製のスタンド笠を少女に譲ってくれた。館主に頼んだ。2年後、釈放された男がその町に戻ってみると……。

(谷)

監督 川崎洋一
2020年/中国
103分